ISAPH News Letter

アイサップ
ニュースレター

第11号

2011年9月25日発行

写真：健康教育が終わって風船をもらう子ども達

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

専門家派遣

生き生き健康村プロジェクト 腸管寄生虫感染フォローアップ調査報告

聖マリア病院国際事業部　**山崎　裕章**

派遣は7月25日～8月5日の12日間で、目的は平成21年4月に実施した1回目の腸管寄生虫感染調査のフォローアップでした。

調査実施は8月1～2日の2日間、対象はタケク県セバンファイ郡ブンファナー村の30組の母子計60名で、子どもの平均年齢は3.0歳（2～4歳）でした。調査の結果、腸管寄生虫に感染していた母子は38名（63.3%）で、その内訳は、母親は30名中26名（86.7%）、子どもは30名中12名（40%）でした。母親と子どもで最も多く感染していた寄生虫は、鉤虫（51.7%）、肝吸虫（21.7%）でしたが、重複感染も確認され、3種類の寄生虫（鉤虫、鞭虫、肝吸虫）に感染していたのが3名（母親2名、子ども1名）確認されました。この結果は1回目の調査結果とほぼ同様でした。検査結果は母親に報告され、さらに寄生虫に関する教育も再度実施しました。そして寄生虫が確認された母子へは、郡保健局と郡病院により駆虫薬の投薬が実施されました。

病院にいた子どもに鉤虫卵を見せ、寄生虫の教育を実施

保健センター看護師に技術指導

郡保健局は郡内の子どもに駆虫剤の配布をしています。これに合わせ、ISAPHは同郡内で寄生虫感染を含めた健康教育を実施し、手洗いの指導、また、井戸の設置を行い衛生的な水の供給を支援しています。これにより村人たちは寄生虫の認識を深め、個人の衛生状態の改善を行ってきましたが、寄生虫感染の改善までには至っていないのが現状です。子どもの成長に影響する寄生虫の存在は、将来の地域発展にも影響するため、総合的な寄生虫対策が望まれます。

新職員あいさつ

ラオスへ赴任しました

ISAPHラオス　**下津　房枝**

皆様はじめまして、下津房枝と申します。平成13年～15年までJICAラオス事務所でボランティア調整員をしておりましたので、ラオスへの赴任は2度目になります。以前は首都ビエンチャン勤務でしたが、今回はISAPHラオス事務所の会計、総務でカムアン県にまいりました。

赴任時、ビエンチャンに2泊しましたが、もう10年前の面影はなく、都会になっており、びっくりしました。一方、ここタケク市はまだまだ田舎の雰囲気が残るのんびりした街です。ちょうど10年前のビエンチャンのようで、私にとっては居心地が良いです。メコン河が直ぐ側にあり、隣国タイが肉眼ではっきりと見えます。先日、はじめて船で河を渡り、タイへ行ってまいりました。船が想像以上に小さくてびっくりでした（屋形船より小さい！）。帰りは少し大きめの船でしたが……、床の隙間から茶色い水が見えるのはドキドキもので、緊張しました。隣国が繋がっていない日本人としては、はじめての体験で、楽しいと言うか不思議な感覚でした。

皆様にも機会がありましたらぜひお越しいただき、ISAPHの活動を見ていただきたいと思います。ラオス事務所のメンバーは、私とドライバー以外は皆医療従事者なので、毎日のように定期活動に出掛けては、子どもの身長・体重のデータの採取、健康教育の実施、そして母子保健に関するデータを纏め、母子の健康増進のため活動をしております。私は、縁の下の力持ちとして頑張りたいと思います。

皆様からも、いろんな形でご支援いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

下津職員（事務所にて）

JICA地球ひろば ラオス月間イベントに参加して

ISAPH事務局　**磯　東一郎**

今年８月はJICA地球ひろばのラオス月間でラオスに因んだ催し物が多く行われました。８月21日（日）にはラオス関連セミナーが開催され、ISAPHもラオスにおける母子保健プロジェクトの活動を紹介する機会をいただきました。セミナーには120名の参加者があり、ISAPHの他に名古屋大学の横山智先生による「ラオスの農山村地域の生活と近年の変化」のお話や、ラオス大使館や青年海外協力隊ラオスOV（元隊員）会によるプレゼント抽選会、そして中国、タイ、ラオスなどアジアで広く活動しているバンド「GYPSY QUEEN」の歌もあり、盛り沢山なセミナーでした。

ラオスの活動報告では、カムアン県の活動地域の住民の生活状況から保健医療の問題を述べ、ISAPHの活動、特にJICA草の根技術協力事業「生き生き健康村づくりプロジェクト」による栄養・衛生教育の活動とその成果についてパワーポイントで説明しました。また、現地で使用している保健教育教材であるパネルシアターの実演も行い、参加者の皆さんにも楽しい健康教育を実感していただきました。

なお、今回の講演では、ラオスの紹介の他、ISAPHの広報の機会として、マラウイでの地域保健支援活動、災害被災地支援活動、人材育成支援としてのスタディツアーなど活動全般についてお話しました。今後もこのような機会には積極的に参加し、ISAPHを多くの人々に知っていただくよう努めたいと思います。

パワーポイントを使って説明

I（アイ）サイクルプロジェクト活動報告

ISAPH事務局

キャップ分別作業は毎月１回、聖マリア病院内でボランティアが集まり行われています。参加者は主に、聖マリア病院職員、聖マリア学院学生、保健医療経営大学学生、関係業者です。作業はキャップのラベル剥がし、キャップの色分け、異物除去、梱包で、１時間ほど行われます。収益金はラオス活動におけるビタミンB1購入の他、ミルク支援にも使われています。

今回は３月～９月までのペットボトルキャップ収益としてiサイクルプロジェクトより31,396円（キャップ627,840個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

キャップ分別作業の様子

大学生もボランティアで参加

ラオスからの報告

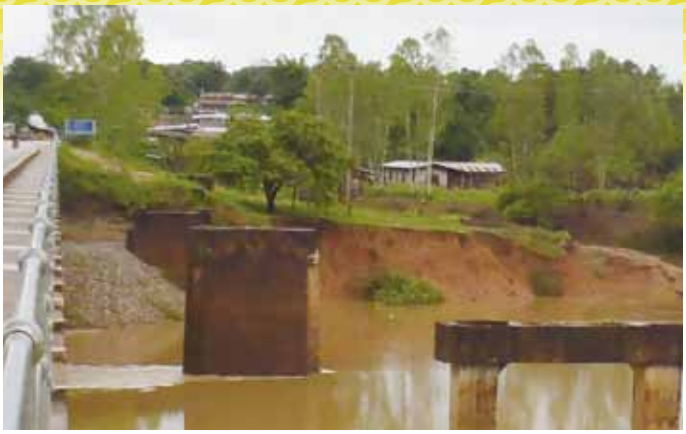
水害援助

洪水被害の緊急支援

ISAPHラオス事務所

ISAPHの活動地区である３地区（シーブンフアン、カシ、カンペータイ）一帯が10年に一度の洪水に見舞われたため、８月11、12日に緊急救援物資支援を行いました。６月末から降り出し１カ月以上降り続いた雨で、道路はもちろん水田、家も冠水しました。郡からの支援要請は4,000ドルで、それを他のNGO団体と分担しISAPHからは、75,330円の支援を行いました。

支援の内訳は、ペットボトルの水300本、医薬品、食料（即席めん）、その他（ガソリン代等）で、郡保健局、公民館、学校などには多くの避難民が押し寄せました。ISAPHの事務所は、幸い無事でしたが、この大雨で活動が中止となり、この間行われたスタディツアーもカンペータイ地区を訪問予定でしたが、変更となりました。



洪水前

洪水後

寄　付

寄付金による支援について

ISAPHラオス　**岩田　和子**

村人に対する寄付金による支援は、ISAPHが主活動以外に行っている活動です。

平成20年６月にシーブンフアン地区ブンフアナー村のある集落の一貧困家庭で、母親が亡くなり、父親も去ってしまい、祖父母に育てられていた生後２カ月の乳児に遭遇したことから始まりました。ひと月2,000円もする粉ミルクは購入できないため、コンデンスミルクを水で溶いたものを与えていました。赤ちゃんは、青白い顔で弱々しく泣いており、衣類もボロ布で巻かれているだけでした。ISAPHの職員誰もが「何とかしたい」と思いました。ラオス人職員は不要な布やタオルで赤ちゃんの服を縫い、日本人職員は粉ミルクを購入し支援しました。その子は今も元気に育っています。

以来、寄付を募り支援活動を始めました。支援を受ける条件は、命に関わるものであること、そして公共の病院での診察・治療を受けることです。現在までに母子保健に関る分娩や疾患の支援、また、母親の死亡や疾患により母乳が与えられない乳児への粉ミルク支援（満１歳まで）など、延べ106人にこの支援を行いました。

寄付金は、iサイクルプロジェクト収益金の他、ISAPHラオス事務所にスタディツアーや出張などでプロジェクトを訪問された方などからいただいたものです。

治療の受け入れ先であるセバンファイ郡病院やカムアン県病院でも、検査料金やベッド代、移送のための車両などを支援しており、ISAPHだけでなく医療機関も協力し合いながらこの活動は継続されてきました。しかし、慢性的に資金不足の状態が続いております。これからも、より多くの人々が　治療や支援を受けられるよう、このニュースレターをご覧になっている皆様からも、ご支援を賜りたく心よりお願いを申し上げます。

一番初めの支援者

2010年５月。足の湿疹が２カ月以上治らなかった幼児

マラウイからの報告

マラウイ国ムジンゲ村コミュニティ開発プロジェクト概略

ISAPH事務局　齋藤　智子

平成６年から11年にかけて、聖マリア病院国際協力部（現在は国際事業部）はJICAマラウイ公衆衛生プロジェクトに数名の職員を専門家として派遣していました。その時のカウンターパートの一人で助医師(医療の専門学校を出た治療・診断のできる医療職）であるジワ氏から「自分の出身村であるムジンゲ村の村人に医療を提供したいので医療施設の設立を支援してほしい」との訴えがありました。そこで、聖マリアグループ職員の皆様方へ寄付をお願いし、その寄付金によってヘルスポスト（H/P：最小単位の医療施設）が創設され、診療や健診、予防接種などが行われています。

聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事　浦部　大策

JOCAと農業支援活動

アフリカ、マラウイ国にて医療協力活動を立ち上げようと、北部のムジンバ県を視察しました。その際、JOCA（青年海外協力協会）の活動サイトにもお邪魔させていただきました。初めて目にする農業の支援現場に驚くとともに、村人がJOCAを信頼しているのがひしひしと伝わってきました。

まず村に着くと、数人の女性が歌で迎えてくれました。内容は「私たちはアフリカで最も進んだ農業を実践している」。ある農家の話では、JOCAがこの地で農業の技術指導を始めてから、農業の生産性が上がり、現金収入も増えたそうです。JOCAは、農家には物の支援は一切行わず、ただ技術指導の提供のみというのが基本スタンス、農民の自主的な行動を手助けする事を基本にしている、ということでした。農家には鶏や豚、ヤギなどの家畜が飼われ、その糞尿を肥料とした畑には数種類の野菜が勢いよく育っていました。

JOCAの指導は結局、農民に自立を教えているのです。まさに国際協力の真髄でありISAPHが目指すべき道と感じました。

JOCAの指導による試験畑。農民が共同で農業を勉強している

聖マリア病院国際事業部　山崎　裕章

マラウイ共和国プロジェクト形成調査

“The Warm Heart of Africa（アフリカの温かい心）”の国、マラウイ共和国（以下「マラウイ」）に平成23年８月20日から29日までの10日間、プロジェクト形成のための調査メンバーの一員として行きました。プロジェクトの対象としている地域は、マラウイ北部のムジンバ県(以下「ムジンバ」)です。このムジンバは、ISAPHが設立された時から支援を行っている地域です。

マラウイにおける５歳未満児の死亡率は出生1,000人に対して110人（平成21年）で、主な死因としてはマラリア、肺炎、下痢、麻疹などが挙げられています。これらの罹患の要因として栄養失調があります。マラウイ政府は、３歳児の56%が慢性的栄養失調、そして30%が低体重であると報告しています。プロジェクト実施にあたっては、５歳未満児に焦点を当て、疾病の予防、早期診断・治療、そして栄養改善にかかる活動が必要と強く感じました。

シマ(主食、中央の白)とディオ(副食)

ムジンゲ村ヘルスポストのその後

今回のISAPHのマラウイ共和国プロジェクト形成調査で、ムジンゲ村に設置したH/Pを訪ねました。ここにH/Pが設置されるまでは、ワクチン接種、子どもや妊婦の健診は数キロ離れた村まで行かなければならず、時として診察・治療が遅れてしまったことも多々ありました。現在、H/Pでは移動診療の他に、医療従事者が配置されワクチン接種、５歳未満児健診、妊婦健診、HIV検査とカウンセリング、栄養改善、衛生指導やマラリア、肺炎、下痢等の子どもの死亡率が高い疾患の診断と初期治療などが実施されています。

ムジンゲ村をはじめとするこの地域においてH/Pの存在意義は非常に大きく、村の開発員会からはH/Pの設置の感謝を改めて受け、今後のさらなる村の発展への協力について要請を受けました。

村の開発委員会からの歓迎

※なお今回の調査では、JICA（独立行政法人国際協力機構）マラウイ事務所、九州国際センター並びにJOCAの皆様に多大なご協力をいただきまして心からお礼申し上げます。

スタディツアー

平成23年8月13日㈯～18日㈭で、保健医療経営大学・聖マリア学院大学合同スタディツアーの受け入れを致しました。参加者は保健医療経営大学2名（学生1名・引率1名）、聖マリア学院大学3名（学生2名・引率1名）の計5名です。

スタディーツアーで学んだこと

保健医療経営大学　**宮地　宏昭**

今回、保健医療経営大学の海外フィールドワークで、ISAPHが企画したラオスでのスタディツアーに参加し、地域の保健局から国レベルの医療機関まで見学することができました。ここでは、医療情報の取り扱いの視点から感想を述べようと思います。

タケク市内にあるカムアン県病院では、乳幼児の身長や体重などの発育状態を記録する現場を見学したり、病院長から医療の質を上げるという中長期目標を伺ったりしました。しかし、乳幼児の発育状態を記録する際、44cmを40cmといったように身長を1の位で四捨五入するなど医療情報が雑に取り扱われていると伺いました。また医療の質については、医療機器を揃えることが医療の質の向上だと考えられており、患者満足度などの医療の質を評価する指標が使われていません。そもそも、そのような指標自体が存在しないようであり、日本と異なり、どのように病院管理を行っているのか疑問に思いました。このように、医療情報が正確に取り扱われていないため、医療事故などのトラブルを発生する危険性があるのではないかと危惧されます。さらに、正確な情報や指標が無いため、病院管理が難しいのではないかと思います。今後、長期的に医療機関の運営を行うためには、医療従事者がより正確に医療情報を集め、医療情報の評価指標をつくり、医療の質を向上することが必要なのではないかと感じました。

乳児の体重を測る看護師さん

ISAPHラオスの活動地域を訪問して

聖マリア学院大学　看護学部看護学科
大関　千尋
出澤　紗梨衣

今回のスタディツアーでは、文化や慣習の違いと、貧しい人々が災害に直面した時の困難さを学ぶとともに、助け合う心や思いやりについても考えることができました。

当初の予定では、カンペータイ地区でのISAPHの活動や乳幼児健診などを見学する予定でしたが、洪水の影響で行くことができませんでした。しかし、今回避難されている住民を訪問することができました。

避難より一週間経過した被災民の方々を訪問し、その避難所での困難な生活を観察しましたが、今後の栄養不足・不衛生な環境での感染症の集団発生が危惧されました。被災民の方々はとても厳しい生活環境にもかかわらず、笑顔で私たちを迎えてくれたことに感謝すると同時に感動を覚えました。また、我々が企画した健康教育に快く参加下さり、ラオスの方々の他者に対する配慮の深さを感じました。健康教育の中で、郡保健局の医師が住民の生活特性を知った上で、「今食べ物がないからといって腐ったものを食べると下痢につながる」など非常に具体的な事例を挙げて感染予防を説明しており、被災民の方々の厳しい生活の現実と「今、住民自身ができること」を具体的に伝えることの重要性を学びました。被災民の方々はもともと農業を生業とし、自給自足の生活を送っています。上下水道やトイレなどの衛生施設が整備されていないなど、普段の生活においても衛生環境は十分ではありません。しかし、集団生活を送る上では、ひとたび感染症が発症した場合には、生命の危機に直面することとなります。よって、今回の健康教育を思い起こし、日々の生活に活用していただければと思います。

ラオスでは、亡くなった人の魂は亡くなった場所に帰るという言い伝えがあります。そのため、病院で死を迎える前に、家へ連れて帰るそうです。被災民の方々がこの避難所で生命を終えるようなことがないようにと祈ると共に、脆弱な国、地域、人々が被災した場合の困苦から学んだことを今後の看護活動に活用していきたいと思います。

健康教育を行う様子
大関さん（右）、出澤さん（左）

避難中の被災民の方々

ナショナルスタッフ紹介

ラオス

ISAPH ラオス
トーンスック・チュンラマニー

私は、トーンスック・チュンラマニー、38歳です。カムアン県タケク市のチョムトン村に住んでいます。私は以前オランダの支援団体が運営するタイの難民キャンプ内の病院で働き、その後ビエンチャンのコンピューター会社に勤務していました。

結婚･出産を機に家事や育児をしたり､夫の運営しているコンピューターシステム会社を手伝っていましたが、今年（平成23年）1月よりISAPHラオス事務所で働いています。私は、ここで働ける事に感謝と喜びを持っています。ISAPHで私の可能性や経験をもっと生かせる事ができるのではと思っているからです。ISAPHの活動の成果が出せ、対象の住民の皆さんの健康を最大限に良くするようにプロジェクトの皆さんと頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。

マラウイ

ISAPH 事務局　**齋藤　智子**

マラウイ国ムジンゲ村コミュニティ開発プロジェクトの連絡係をしてくれているチャリティさんとジワさんを紹介します。

チャリティさんは聖マリア病院から専門家を派遣していた「JICA公衆衛生プロジェクト」（平成6年～11年）の秘書でした。また、ジワさんはこのプロジェクトのカウンターパートの一人であったジワ氏の奥さんです。しかし、残念ながらジワ氏が志半ばで平成13年に亡くなってしまったため、奥さんが氏の遺志を継いで関わってくれています。

現在チャリティさんは日本側との連絡を、ジワさんは現地との連絡を取ってくれています。二人とも今は別の仕事を持ちながらも、村人の健康を守るためボランティアで引き受けてくれています。

ジワさん（右から2番目）

チャリティさん（左）

ラオス事務所 所長離任のお知らせ

ISAPH 事務局

9月7日付でラオス事務所の所長高畑恒雄氏がラオス事務所所長を離任することとなりました。9月8日より椋（はんどう） 清美プロジェクトマネージャーが事務所長兼任となります。

最近のできごと　2011年4月～9月

4月25日	年長者への健康教育継続実施開始
5月7日	ラオス国内で活動する日本のNGOやボランティア主催による、東日本大震災支援フリーマーケット参加
5月10日～12日	年長者への健康教育実施
6月9日	青年海外協力隊および協力隊カウンターパート研修受入れ
6月23日、24日、29日	年長者への健康教育実施
6月30日	事務所移転
7月22日	セバンファイ郡保健局で ユニセフのMulti Micronutrient Powder（微量栄養素）配布のための研修会を実施
7月29日	セバンファイ郡保健局で寄生虫検査実施に関する研修会実施
8月3日～5日	JICA新職員活動実習受入れ
8月11日、12日	セバンファイ郡洪水被災者への救援物資支援実施
8月13日～18日	聖マリア学院大学および保健医療経営大学スタディツアー５名受入れ
8月20日～30日	マラウイ案件現地調査及びムジンゲ村ヘルスポスト稼働確認
8月21日	JICA地球ひろばで行われたラオスデーでISAPHが講演
8月24日	セバンファイ郡保健局で最終調査のための研修会実施
8月29日	最終調査のためのプレテスト実施
9月1日、2日、9日	最終評価のための調査実施
9月18日～20日	東邦大学スタディツアー受入れ

ISAPHの役員名簿

役　職	氏　名	備　　考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理　事	深見　保正	元福岡県企業管理者
理　事	湯川　　武	早稲田大学研究院教授
理　事	樋口　敬記	梓設計九州支社特別顧問
理　事	浦部　大策	聖マリア病院国際事業部
監　事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員　入会金：30,000円　年会費：30,000円

一般会員　入会金：3,000円　年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】
郵便振込　口座名　特定非営利活動法人ISPAH
口座番号　00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH　東京事務所
〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2　新橋OWKビル３階
TEL.03-3593-0188　FAX.03-3593-0165
E-mail　tokyojimusho@isaph.jp
URL　http://isaph.jp/

東京事務所案内図

【ISAPHニュースレター　第11号　編集スタッフ】
槇村さおり／磯東一郎／中野博行

社会医療法人
雪の聖母会
聖マリア病院

理事長：井手義雄　病院長：島 弘志
〒830-8543　福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322㈹　FAX.0942-34-3115
URL　http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative（赤ちゃんにやさしい病院）WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.5.0）
- 総合周産期母子医療センター（NICU・MFICU）
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 15189認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力を頂いています。